

# 天保十四年の キャリアオーバー

五十嵐貴久

第一回

大序

柝おきの音ね

\*

かすかな空咳からせきの音に、矢部鶴松やべつるまつは目を開けた。早晩寅そうぎようたらの刻こく（午  
前四時頃）、まだ夜明け前である。

待て、と声をかけて床とこから起き出し、急ぎ身支度を整えた。いず  
れこの日が来るとわかっていたため、衣服は枕元まくらもとに用意していた。  
失礼致しますという声とともに、襖ふすまが細く開いた。廊下に正座し、  
頭を垂れているのは矢部家人やうじん、大田原権野助おおだわじごんのすけという老人である。  
「早朝より申し訳ありません。伊勢桑名藩いせくわなはんより、使いの者が訪れて  
おりまする」

何用か、とは聞かなかった。寅の刻という刻限を考えても、容易ならざる事態であろう。

権野助が二の腕で顔を覆おおっている。泣いているようだった。

このひと月ほど、眠れない夜が続いていた。覚悟はしていたつもりだったが、矢部家に仕えて長い老人の涙を見て、心が波立つように揺れた。

脇差わきざしだけを腰に差し、権野助の先導で寝所を出た。旗本はたもとである矢部家の屋敷は広く、部屋数も多い。

昨年、天保十二年（一八四一年）十二月、養父矢部定謙さだのりが南町奉行を罷免ひめんされてから、権野助以外の奉公人を他家に預けているため、屋敷は静かである。旗本屋敷は主人の接客用の書院を中心に造られているが、伊勢桑名藩からの使いの者が通されていたのも、その部屋であった。

十畳ほどの部屋の下座たんざに端座たんざしていた若い侍が、入ってきた鶴松の姿を見て平伏した。矢部家は自身の旗本たいしんであり、位階じゆごは従五位下、官職するがのかみは駿河守である。身分の違いもあるのだろうが、肩を震わせているその姿は異様ですらあった。

「拙者、伊勢桑名藩郷士ごうし、沼羽泰之進ぬまばたいのしんと申します。弊藩預かりとなっておられた矢部定謙殿の世話役を務めておりました」

声が洩かれている。お茶を、と権野助に囁ささやいて、鶴松は上座に着い

た。

「矢部定謙の養子、鶴松です」

顔を上げてくださいと言ったが、沼羽は頭を振るばかりである。

用件の筋、わかっておりますと言うと、手元に置いていた小さな箱を差し出した沼羽が、遺髪でございませと叫ぶように言った。

「十日前、七月三日、矢部定謙殿は自ら腹を召されました。見事な最期だったと——」

声が途切れた。やはり、と鶴松はうなずいた。

「幕府の沙汰さたを待つまでもなく、己の不始末を詫びるつもりだったのでしよう。桑名藩まつだい松平忠暁様にも、これ以上ご迷惑をおかけするのは忍びないと思つたのかも知れませぬ」

とんでもありません、と沼羽が首を振った。

「矢部定謙殿の名誉回復のため、藩主忠暁様も老中ろうじゅうみずのただくに水野忠邦様に正式な申し入れをすると決めておられました。ですが……」

父上らしい、と鶴松はつぶやいた。讒言ざんげんにより南町奉行を罷免された定謙は悔しかっただろう。正式な処分が決まる前に自死したのは、抗議のためだったに違いない。腹を切ったのも、武士としての誇りを守るためだ。

切腹とは死罪のひとつの形であり、武士にのみ許される作法である。実際に行なう際は、介錯人かいしやくにんがつく。

様式化されているため、腹に短刀を当てれば、即座に首を落とされる。そこに痛みや苦しみはない。

沼羽は口にしなかったが、父の切腹は父一人で決め、実行したと察しがついた。激情家の定謙らしいが、腹を切っても簡単に死ぬことはできない。どれほど苦しかったかと思うと、胸が痛んだ。

土瓶と湯呑み茶碗を盆に載せた権野助が書院に入り、不調法で申し訳ありませぬと湯呑みを二人の前に置いた。女手がないので、と鶴松は苦笑して箱の蓋を開いた。

髻まげの髻もみじりが入っている。他にもいくつか私物があった。有田焼の小さな杯は、矢部家に代々伝わる家宝である。他に刀つばの鍔、木製の鍵、家紋が入った巾着きんちやくもあった。

「本来でしたら、江戸までご遺体運び、埋葬するべきだと存じておりますが」目を伏せたまま沼羽が言った。「この暑さゆえそれもかなわぬと、桑名の墓所に葬ることに相成りました。お許しください」

礼のないことですか、と権野助がほとんど聞き取れないほど低い声で言った。南町奉行まで務めた大身の旗本を、縁ゆかりも縁ゆかりもない桑名の地に葬るというのは、これほど無礼な話もないが、仕方ないと鶴松はため息をついた。

「伊勢桑名藩の責任ではない。老中水野様そんたくへの付度そんたくがあったのだから。何を言っても始まらぬ」

こちらを、と沼羽が懐の書状を取り出し、畳に置いた。

「定謙殿から、鶴松殿に直接手渡すようにと……」

手を伸ばした鶴松は、そのまま顔を横に向けた。玄関から重い足音が近づいてくる。一人ではない。十人近くいるようだ。

書院の襖が左右に大きく開き、先頭にいた異常なまでに痩せた中年の男が土足で上がり込んだ。子供のように背が低い。

後ろに控えているのは、南町奉行所の与力たちである。数人、人相の悪い男たちが混じっている。目明かしの類だろう。

中年の男が無言で書状を取り上げ、封を切った。無礼でありましようと権野助が立ち上がったが、鶴松はそれを止めた。

「鳥居様、お座りください」座っておれ、と権野助に命じた。「このような早朝から、何の御用でしょうか」

かねてから詮議中だった前南町奉行、矢部定謙が自害した、と鳥居耀蔵ようぞうが女のように高い声で言った。金物が口を開けば、こんな声を出すのではないか。耳障りで、聞いているだけで不快な気分になった。

「自らの罪を認め、幕府からの命を待つことなく、勝手に腹を切った。それもまた不敬であるが、今回は良しとしよう」

これで矢部定謙が科人とがにんであることは明らかか、と鳥居が甲高い声で囓わらった。

「矢部鶴松、南町奉行として沙汰を申し付ける。今日より矢部家は改易かいえきとなる」

無言で鶴松は頭を下げた。養父定謙が南町奉行を罷免された時から、いずれそうなるとわかっていた。どう転んでも、矢部家は終わる。

書状に目を通していた鳥居が、意外だなとつぶやいて、背後にいた禿頭はげあたまの大男に渡した。蛭ひるの仁吉にきちと呼ばれている目明かしである。

「この鳥居への恨み言でも書き連ねているかと思ったが、お前の無病息災を祈るとか、益体やくたいのないことを書いてあるだけだ。だが、これは南町奉行所が預かる。吟味した上で、不審がなければ返してやろう。せめてもの武士の情けである……それは遺髪か？」

鶴松は箱を前に押し出した。中に目をやった鳥居が、不愉快そうに顔を背けた。

「触れるだけで手が汚れそうだ。世間から蝮まむしと呼ばれているこの鳥居だが、慈悲の心は持っている。それはお前が丁重ていちょうに葬るがいい」

無言のまま、鶴松は頭を下げた。明日までにこの屋敷を引き払うように、と鳥居が命じた。

「矢部定謙は科人、矢部家は改易。鶴松、お前はもう旗本ではない。この屋敷に住むことなど、許されるはずもない」

明日までというのは、と顔を真っ赤にした権野助が立ち上がった。

「あまりにも急ではありませぬか。定謙様が亡くなられ、鶴松様も心の整理がついておりませぬ。たった一日で出て行けというのは、いくら鳥居様でも——」

一歩前に出た鳥居が、赤子のような小さな手で権野助の頬を張り、南町奉行に対し不遜であるふそんと甲高い声で叫んだ。

「身分をわきまえよ。用人の分際で何を言うか」

明日中に必ず、と鶴松は頭を下げた。お前は賢いな、と鳥居が泥のような色の顔を歪めて嗤った。

鶴松は畳に強く額をこすりつけた。元来、短気な性分である。心の中に膨れ上がる怒りを押さえつけるためには、そうするしかない。心  
つた。

「よいか、しかと申し付けたぞ。明日夕刻までに、この屋敷を引き渡すように」

そのまま鳥居が書院を出て行った。一人だけ残っていた初老の男が鶴松を見つめて、小さく首を横に振った。

## 第一幕

なるかみ ふどうきたやまざくら  
雷神不動北山櫻

一

(まだか)

寒い、と足踏みしながら、夕方の冷たい風を避けるため、男は同心屋敷の軒下に下がった。小雨が降っていた。

天保十四年（一八四三年）、旧暦十一月、季節は冬である。寒気が全身を覆っている。

着ている衣服はすだれのようなものである。しかも裸足だ。真っ青になっている足先が凍りつきそうだったが、耐えるしかない。

正面に南町奉行所の門が見える。その両脇に武士が立っていた。門衛である。

畜生ちくじやう、と男はつぶやいた。伸び放題の総髪そうはつ、顔は髭ひげだらけである。六尺（約一八〇センチ）と背が高いこともあり、自分の姿が目立つことはわかっていた。

もう何カ月も体を洗っていない。湯屋に行く金もないのである。一日一食がやっとだった。頬はこけ、全身から鱧すえたような匂いが漂っているが、気にもならなかった。浮浪の徒とと思われるだろうから、むしろ好都合かもしれない。



懐に手を入れ、短刀の感触を確かめた。これで奴を殺す、と心に決めている。

南町奉行、鳥居耀蔵が一日一回、巡察のために奉行所から出てくることは調べていた。ただし、刻限は日によって違う。

真昼から見張っていたが、昼七つ（午後四時頃）近くなっても出てくる気配はなかった。手が震えているのは、寒さのせいもあったが、それ以上に鳥居への怒りのためだった。

あの野郎だけは生かしちやおかねえ、とつぶやきが漏れた時、奉行所の門前で動きがあった。これまでも人の出入りはあったが、様子が違う。

鳥居の野郎に違いない、と男は懐の短刀の柄えをしっかりと握りしめた。

南町奉行、北町奉行、いずれも奉行の自宅は奉行所内にある。調べるまでもなく、江戸の者なら誰でも知っている。

奉行は昼四つみ巳の刻（午前十時頃）、江戸城に登城し、老中への報告や会議に加わった後、昼九つうま午の刻（午後十二時頃）までに奉行所へ戻り、その後は吟味や裁判を行なう。

百万人が暮らす江戸の町の治安を護る要職である。職務内容は後の警察と裁判所を合わせたものに近い。多忙を極める激職であり、在職中に過労で死ぬ者も少なくなかった。

自宅を奉行所内に置くのは、職住隣接の知恵である。職務が終われば、そのまま帰宅することができる。

加えて、身辺警護のためでもあった。奉行は警視総監と最高裁判所の裁判官を兼ねる役職である。すべての罪人を捕縛し、裁く役目だが、そのために恨みを買うことも多い。他の役職に就いている旗本のように自宅が別であれば、襲撃に備え大勢の護衛が必要になる。

その点、奉行所内に自宅を置けば不安はない。常に門は閉ざされているし、門衛もいる。また、与力やその配下である岡おかつび引き、目明かしなど、警護のための人数も揃っていた。

ほぼ毎日江戸城へ上がるが、その際には奉行を護るための武士が付き従っているので安全である。江戸中の者から蝮だかつと呼ばれ、蛇蝎とくの如く憎まれている鳥居は、その執拗しつような性格もあり、異様なほど用心深かった。一度奉行所に戻れば、めったに外出しないが、唯一市中見回りだけは奉行としての義務であるため、表に出ざるを得ない。

もちろん、その際も大勢の護衛がつくが、奉行所の門を出る時だけは油断しているのが、ひと月以上見張っていた男にはわかっていった。さすがの鳥居でも、奉行所の前で襲ってくる者はいないと思っているのだろう。

だからこそ狙い目だ、と男はつぶやいた。無論、鳥居を殺したところで、自分も捕縛されるだろうし、その場で殺されるかもしれない

い。それでもいい、と半ば捨て鉢すばちな気持ちがあった。

殺されても構わねえ。俺を無間地獄むげんにたたき込んだ鳥居を殺せるなら、どうなつてもいい。

寒風は止やんでいたが、体の震えは止まらなかった。門衛たちの動きで、間違まちがいなく鳥居が出てくるとわかつたためだった。これが武者震むしゃげんいつて奴か、と男は思った。

鳥居は馬上から市中見回りに出るが、馬術は不得手ふえてである。そのため、奉行所べいぎょうしょを出るまでは徒歩だった。

一人で馬に乗ることができないので、介添けいぞんえが必要になる。その時が男の見つけた鳥居の唯一の隙ひまだった。

馬にも乗れない男が、南町奉行という旗本として最も高い地位に就ついているのか、と男は皮肉な笑みを浮かべた。士道不覚悟とは、まさに鳥居耀藏とりいさざうのためにある言葉であろう。

門が大きく左右に開き、まず馬を引く馬丁ばていが現れた。その後ろに、数人の武士を従したがえた小柄な男の姿が見えた。目が糸のように細く、顔色は暗褐色あんかつしよくだが、唇くちびるだけは真っ赤である。

鼻梁びりょう、口元くちもと、顎あご、耳みみ、顔全体が尖とがっていた、蝮へびという異名はその粘着質ねりあつかな気質にもよるが、外見も蛇そのものであった。

手のひらに唾つばを吐き、男は短刀の鞘さやを懐ふちの中で抜いた。馬丁が手綱てなづなを押さえ、馬を落ち着かせている。数人の武士が小柄な鳥居の脇

に腕を入れ、持ち上げた。今だ。

「失礼」

背後から声がした。振り向く間もなく、鳩尾みぞおちに拳が突き刺さる。そのまま、男は気を失った。

一一

目を開けると、女の顔が近くにあった。まだ若い。二十歳にもなっていないだろう。

やや細面ほそおもてで、肌が透き通るように白い。美人画から抜け出てきたかのようなのである。話に聞く天女とは、こういう女のことを言うのではないか。

「起きたの？」

女が顔を覗き込んだ。天女にしては口が悪い。見た目はどこぞのお嬢様かと思ったが、口調は伝法でんぽうで、子供のようですらあった。

「自分で持って」女が冷たい手拭てぬぐいを男に握らせた。「まったく、手が掛かるねえ。それにしても臭いこと。鼻がもげそうだよ。風呂ぐらい入ったらどうなの。首あかに垢あかが浮いてるよ」

悪あしさま様な罵ののりが途切れなく続く。あんたは誰だ、と言おうとしたが、口がうまく動かない。

鳩尾の辺りが痛む。右手の手拭を額に当て、左手で腹を押さえたまま、上半身を起こした。

「……ここはどこだ？」

狭い部屋である。長屋だと察しはついたが、なぜ自分がこんなところにいるのか、それがわからなかった。

「おい、いったいどうなってる。おめえが俺をここに運んできたのか？」

おめえって誰のことよ、と女が怖い顔になった。

「名前があるんだ。お葉よって呼びな」

さっぱりわからん、と男は手拭を畳に放って、薄い布団の上にあ座くらをかいた。

「畜生、どういうことだ？ 誰が邪魔立てしやがった。あの蝮野郎をぶつ殺す、千載せんざい一遇いちぐうの好機を逃しちまったじゃねえか」

あなたにそんなことはできませんという低い声と共に襖が開き、

五尺六寸（約一七〇センチ）ほどの男が入ってきた。

紺かすりの着物から、長い手足がはみ出ている。顔の造作つくりは整っていた。特に切れ長の目は爽やかである。

俺より五つ六つ下だろう、と男は当たりをつけた。二十八か二十九か、それぐらいではないか。六尺ある自分よりずいぶん小柄に見えるのは、顔が小さいためだった。腹が立つほどのいい男である。

「もう少し休んでいた方がいいでしょう」枕元に座った男が、わたしは矢部鶴松と申します、と名乗った。「すみません、当たり前が悪かったようです。もつとも、骨は折れていませんから、小半刻ほどこはんとき寝ていれば痛みは取れるでしょう」

寝てなよ、とお葉が男の両肩に手を掛けて、強引に押さえ付けた。

離しやがれ、と男はその手を払った。

「おい、いったい何なんだ？ どうなってる？ どういう料簡りようけんだ？ あんた、いったい誰だ。この女は何だ？ ここはいったいどこなんだ」

さすがですね、と鶴松が手を叩いた。

「ここが芝居小屋なら、成田屋なりたやと声をかけたいところです。口跡こうせき

の良さは、さすが江戸一の歌舞伎役者ですね」

「俺のことは知ってるのか？」

江戸の町であなたのことを知らない者などいませんよ、と鶴松が

言った。木訥ぼくとつな声が誠実な人柄を偲おもばせた。

「七代目市川團十郎いちかわだんじゅうろうといえは、日本一の歌舞伎役者です。知らないはずがありません」

俺はもう役者じゃねえ、と團十郎は首を振った。わかっています、と鶴松がうなずいた。

「あなたが中村座の舞台上で南町奉行、鳥居耀蔵に捕縛された時、

わたしもあの場にいました。これでも、わたしはあなたの鼻肩筋ひいきすじなんですよ。その後手鎖てぐさり五十日、そして江戸十里四方所えどじゅうりしほうところばら払いの罰を受けたことも知っています」

おめえ、何者だと團十郎は鶴松を見つめた。姿形は町人だが、所作は武士のものだ。座っているだけだが、凜とした佇まいたたずである。

おいおい話します、と鶴松がまたうなずいた。

「ただし、その前に言っておきたいことがあります。あなたを捕縛し、江戸から追い払い、七代目團十郎の名跡みやうせきを奪った鳥居耀蔵を恨むのはもつともなことですし、殺そうとまで思い詰めるのも無理はありません。とはいえ、あなたにそんなことはできませんよ」

なめるな、と團十郎は立ち上がったが、激痛が横腹を走り、また座り込んだ。言わんこつちやない、とお葉が着物の袖で口元を隠しながら笑った。

「あの男は幕府の儒学者、林大学頭はやしだいがくのかみの息子です」身分は武士ですが、もともとは学者なのです、と鶴松が口を開いた。「馬術はもちろん、剣術も修めています。太平の世ですから、必要のないのもその通りです。小柄で腕力もありませんが、それは役者の家に生まれたあなたも変わらないでしょう。舞台の上ならともかく、実際に刀を抜いたこともないはずですよ。体こそ大きいですが、そんなあなたが鳥居を殺せると？」

やっとうは形しか習ってねえ、と團十郎は渋々うなずいた。

「あんたの言う通りだよ。俺にも剣術の心得はねえ。正直な話、喧嘩のひともしたことがねえんだ。だがな、鳥居なら俺だって殺せるぞ」

無理です、と静かな声で鶴松が言った。

「心意気だけでは、傷ひとつ負わせることもできないでしょう。鳥居は己の弱点をよくわかっています。異常に頭が良く、警戒心も強い。周りに手練れの者を置き、何があっても自分を護るよう命じています。わたしが止めなければ、今頃あなたは膾のように切り刻まれていたでしょう」

そういう話じゃねえ、と團十郎は畳を平手で叩いた。

「こいつは男の意地なんだ。おめえが何者なのか知らねえが、俺がどんな目に遭ったと思ってる？ 天下の七代目團十郎だぞ。奴は俺から芝居を奪った。たかが役者風情が何を言うと思うかもしれねえが、芝居は俺の命なんだよ。他に何ができるわけでもねえ。恨みを晴らすには、殺すしかねえだろうが」

似合わないねえ、とまたお葉が笑った。馬鹿にしやがって、と團十郎は手拭を投げ付けた。

「てめえらに何がわかる？ 二年近く江戸を追い払われた俺がどうやって生きていたか、わかるはずもねえ。これ以上生きていたって、



何の意味もねえとわかった。だから江戸に戻ってきた。鳥居を殺して、俺も死ぬつもりだったんだ」

畜生、とひと声叫んで、薄い布団に突っ伏した。脳裏を過つたのは、思い出したくもないあの日のことだった。

三

「成田屋！」

「七代目！」

浅草の芝居小屋、中村座の中で声が飛び交っている。市川團十郎は左右に見栄を切って、目に力を入れた。四方から女の嬌声と悲鳴が起きた。

演じているのは十八番の「雷神不動北山櫻」、鳴神の鳴神上人である。いわゆる荒事の役所だが、観客の心を掴んでいる実感があつた。舞台に立つ快感とはこれだろう。

荒事とは初代市川團十郎が創始した歌舞伎の様式である。人間離れした力を持つ者を、誇張した演出で描くのがその特徴だが、持つて生まれた体格の良さ、顔の道具立てが大きく、目力があることが求められる。

七代目團十郎は初代以来の名人として、江戸中の評判となってい

た。特に鳴神上人は当たり役と評価が高い。

團十郎が演じている鳴神上人は、雨を降らす竜神を滝壺に封じ込めるほどの力を持つ呪術師である。竜神より力がある者は神に外ならない。

帝との約束を破られたことで怒った鳴神上人が竜神を封印したことで雨が降らなくなり、身分の上下に係わらず、誰もが渴きに苦しんでいた。そのため、帝が内裏一の美女、雲の絶間姫を送り込み、色仕掛けで誘い、鳴神上人の神としての力を奪おうと策謀する。

この計略が当たり、雲の絶間姫の色香に抗しきれず、女体に触れることで神通力を失ってしまう、というのが大まかな粗筋だが、七代目團十郎は鳴神上人を少年のような無垢な心を持つ純粋な神だと解釈していた。

荒事の約束事である荒々しい演技に加えて、心の弱さ、哀しみ、純粋さ、そして怒りを表現したため、初代を凌ぐと言われるほどの出来となった。

ここからが見せ場のひとつ、雲の絶間姫の色香に惑わされ、破戒していく場面である。無垢な少年の魂を持つ者が、初めて女性の肉体に触れ、墮落して阿鼻地獄へ堕ちていくその様を演じなければならぬ。

團十郎は舞台の上手下手に鋭い視線を向けてから、大きく見栄を

切った。

「落ちて、こけても、のめつても、だんないだんない——」

突如、場内がざわついた。それと同時に花道に大勢の男たちが上がってきた。どうなってる、と團十郎は袖にいた黒子に囁いた。ささや

奉行所の目明かしです、とひと声叫んだ黒子に飛びかかっていった男が、逆手を取って縄をかける。何が起きているのかわからないまま立ち往生していた團十郎の腕が、左右から掴まれた。

そこまで、と甲高い男の声が響いた。

「七代目市川團十郎、おとなしくお縄につけ。逆らうことは許さぬ」

誰だ、と叫んだ團十郎の前に、小さな影が姿を現した。蛇のように尖った口から、真っ赤な舌が覗いている。

「南町奉行、鳥居耀蔵である。市川團十郎、天保の改革により、奢侈しや贅ぜい沢は厳禁されている。知らぬとは言わせぬぞ。奉行所から沙汰も出ている」

離せ、と團十郎は腕を払ったが、二人の捕吏ほりにかなうはずもない。あつと言う間に引きずり倒され、後ろ手にくくられた。

「その衣装、舞台の派手さ、すべてが禁令に反している。今まではお目こぼしもあったが、もう許しておくわけにはいかぬ。お前の処分も決まっている。手鎖五十日、そして江戸十里四方所払い」

なぜだ、と舞台に顔を押し付けられたまま、團十郎は叫んだ。

「なぜ俺が？ 江戸一の歌舞伎役者、市川團十郎だぞ！」

近づいた鳥居が、だからよ、と耳元で囁いた。

「人気があつて結構だな。だが、それゆえお前を捕縛すれば、誰もが天保の改革の狙いを知ることになる。幕府の威光を知らしめるためである」

見せしめつてことかと怒鳴った團十郎に、馬鹿な役者風情に何がわかると唾を吐きかけた鳥居が、引つ立てると捕吏に命じた。

抵抗したが、捕吏に腹を殴られ、息が詰まったところを舞台から引きずり下ろされた。畜生と叫んだが、蹴り倒されただけだった。

手鎖は刑罰として比較的軽い部類に入り、体の前で手錠を嵌められ、一定期間自宅で謹慎するだけである。だが、歌舞伎役者にとって江戸十里四方所払いの処分はこれ以上ないほど重かった。

天保年間、江戸で歌舞伎を演じることができたのは中村座、市川座、森田座の三座だけである。所払いを受けた團十郎は、その舞台に立つことができない。

役者を続けるのであれば、京都、あるいは大阪へ行くしかないが、生粋の江戸っ子である團十郎にとって、それは都落ち以外の何物でもなかった。

五十日の手鎖が終わると、團十郎はひとまず下総国（千葉県）成

田山新勝寺に身を寄せた。初代市川團十郎が成田不動に帰依して

以来、市川家と新勝寺には深い繋がりがある。

一説によれば、戦国期から安土桃山時代を通じ、廃寺同様になつていた新勝寺が、みょうせきさいこう名蹟再興のため江戸市内ででがいちよう出開帳を行ない、その際初代團十郎に不動明王が登場する芝居を上演するよう依頼したことが、関係を深くするきっかけだったという。

その後、初代團十郎は“成田屋”の屋号を名乗るようになり、現在まで続いている。新勝寺が團十郎の身元を引き受けたのは、その関係の深さから考えて当然のことであった。

とりあえず落ち着いたものの、しばらくの間何をする気にもなれなかった。一人だけでは歌舞伎も何もないし、新勝寺には舞台もなければ客もないのである。

由緒ある歌舞伎の名家市川家に生まれ育った團十郎に、できることは何もなかった。ようやく気を取り直し、再起を期して下総を離れ、京都へ向かったのは三月後みつきのことである。

もともと歌舞伎の発祥は高名な出雲いずものお国に始まり、その活動拠点が上方かみがただったため、盛んになったのは京都、大阪だが、享保年間以降、江戸で隆盛を極めることとなった。團十郎はその江戸で人気を誇る当代一の名人である。勇んで京都、そして大阪を廻ったが、悪評ばかりが大きくなるだけだった。

江戸と上方では、観客の好みが違う。初代團十郎が開いた荒事の

要素が高い江戸歌舞伎と、人の心に焦点を当てた和事わごとに人気のある上方では、すべてが正反対と言っている。そのため江戸一の歌舞伎役者七代目團十郎といえども、京都、大阪では人気を得られなかったのである。

やむなく上方を離れ、各地の城下町の芝居小屋を廻り、舞台に立つことになった。市川團十郎の看板は大きく、名前だけで客が集まったが、いわゆるどさ回りである。やる気を失った團十郎は酒色に溺れ、芸は見る間に荒れていった。

享保、寛政期以降、芝居小屋には屋根がつくようになり、複雑な舞台装置の設置が可能になっている。例えば回り舞台もこの頃造られているし、あるいは花道そのものを演技の場にするなど、演出についてもそれまでの歌舞伎と比べて立体的なものへと変化していた。『せり』が設けられ、見せ場では舞台の下から役者が上がってきたり、宙乗りなど曲芸の要素が取り入れられるようになったのもこの時期である。

團十郎は初代が創始した荒事を得意とし、豪快な演技がその持ち味である。派手に見栄を切り、舞台上を飛び回り、時には二間にけん（約四メートル）飛び上がり、また宙を飛翔することもあった。

だが、そのためには特殊な装置が必要で、江戸、京都、大阪のような大都市以外の地方の芝居小屋で荒事を演じるのは不可能だった。

それでは團十郎としても真価を發揮できない。

市川團十郎の看板は大きく、そのため数多くの観客が芝居小屋に押し寄せたが、すぐに「評判倒れ」「面白くない」と悪評が囁かれるようになった。團十郎の責任というより、荒事を演じることができない舞台のためだったが、客にその事情がわかるはずもない。

客を呼べない主役役者は惨めである。どこへ行っても歓迎されるのは最初だけで、すぐお払い箱になった。

團十郎は各地を転々とし、土地柄や客層に合わせた演目を演じ続けたが、何をしても客は入らなかった。自棄やけになって喧嘩を繰り返すなど、素行の悪さも足を引っぱり、ついには誰からも相手にされなくなった。

人気も名声も芸も失った團十郎に残されたのは、自分を地獄に落とした南町奉行、鳥居耀藏への恨みだけである。鳥居を殺すと決めたのは、二月前のことふたつきであった。

とはいえ、江戸十里四方所払いの身である。まず新勝寺に戻り、僧に紛れて江戸に入った。

鳥居の身边を調べ、機会があればいつでも殺す覚悟でいたが、用心深い鳥居に隙はなく、身边を警護する者も常に十人以上いることがわかっただけだった。

だが、十日前、奉行所を出入りする時だけは警戒が緩むことがわ

かった。南町奉行所がある八丁堀は与力、同心の町だが、同心の多くは拝領された屋敷を町人に貸していたため、身を隠す場所は少なくなかった。

毎日見張り続けていたが、今日こそはと覚悟を決めていたこの日、矢部鶴松に邪魔立てされ、その機会を失った。

気づくと、團十郎は泣いていた。悔しさのあまり、何度も畳を拳で叩き、喚き続けたが、自分でも何を言っているのかわからなかった。

#### 四

お茶でも飲みなよ、とお葉が大ぶりの湯呑みを畳に置いた。

「まったく、大の大人が泣いたり喚いたり、みつともないったらありやしない」

うるせえと怒鳴った團十郎を、静かに、と鶴松が制した。

「お葉さんの言う通りです。もう一度言いますが、あなたに鳥居を殺すことはできません。あなたは江戸一の歌舞伎役者ですし、荒事を演じれば初代以上でしょう。ですが、それは舞台の上での話です。あなたの短刀では、鳥居に傷ひとつ負わせられません」

鶴松が帯に差していた短刀を抜いて、畳に置いた。返せ馬鹿野郎、



と素早く拾い上げて、團十郎は立ち上がった。

「どこへ行くのさ」

お葉の問いに、鳥居を殺しに行くんだよ、と頬を歪めて笑うと、なるほど女性に人気があるのもわかります、と鶴松がうなずいた。

「それだけ凄みのある顔をされたら、誰でもあなたの虜とろこになるでしょう。ですが、まずわたしの話を聞いてもらえませんか。それでも鳥居を殺すと言うのなら、止め立てはしません。七代目團十郎という天才を失うのは悲しむべきことですが、死にたいのならそれもいいでしょう。お座りください。わたしの話を聞いてからでも、遅くはないはずです」

そうかい、とうなずいて團十郎は布団の上に胡座をかき、湯呑みの茶を一気に飲み干した。

「話とやらを聞こうじゃねえか。大体、あんた何者なんだ？ なぜ俺の邪魔をしやがった？」

わたしは矢部鶴松と申します、と鶴松が居住まいを正した。さっき聞いたよ、と團十郎は横を向いた。

「知らねえ名前だ」

当然です、と鶴松が笑みを浮かべた。

「では、矢部定謙の名に聞き覚えはありませんか」

矢部定謙、と團十郎はつぶやいた。

「まさか……謀反むほんの罪で罷免された前の南町奉行のことか？」

罷免されたのはその通りですが、謀反の罪は犯しておりませぬ、と鶴松が首を振った。

「わたしは定謙の養子です。養父は謀反など企んでおりませぬ。すべては濡れ衣。鳥居耀藏の讒言ざんげんにより、南町奉行の職を解かれました。養父の代わりに奉行となったのはその鳥居。あの男は南町奉行にならねばならぬわけがあったのです」

意味がわからねえ、と團十郎は首を捻ひねった。

「いったいどういうことだ？ 話の筋が見えねえ」

すべての始まりは老中水野忠邦によるこたびの改革です、と鶴松が言った。茶をくれ、と團十郎は湯呑みを差し出した。

「長い話になりそうだ。じっくり聞かせてもらおうじゃねえか」  
偉そうに、とつぶやいたお葉が土瓶から茶を注いだ。

\* \* \*

天保の改革とは、享保、寛政に並ぶ江戸期三大改革のひとつである。

徳川家康が開いた江戸幕府の経済政策は、重農主義であった。商業経済が十分に成熟していなかったためであり、米を経済の中心にすることで、幕藩体制は十分に機能していた。

綻ほころびが生じるようになったのは、五代將軍綱吉つなよしの治世期である。家康によって長い戦乱の世が終わり、太平の時代が続くようになる。経済政策が重農主義から重商主義へと変化していたが、その矛盾が綱吉の時代になって噴いき出てきたのである。

幕藩体制いしずえの礎いしずえは米である。だが、現実には貨幣経済が発展していた。この矛盾に対し、幕府は無策同然であり、そのため幕府財政は疲弊ひへいしていくことになる。

その立て直しを図ったのが、享保、寛政、天保の改革であった。共通するのは倹約と増税による財政再建であり、中でも最も厳しい緊縮財政が敷かれたのが天保十二年（1841）に始まった天保の改革である。

第十一代將軍徳川家斉いえなり てんめいは天明七年（1787）十五歳で將軍の座に就いたが、既に幕府財政は破綻はたん寸前であった。家斉がまだ若年であったため、老中首座松平定信まつだいらのぶを中心に実施されたのが、寛政の改革である。

だが、厳格な倹約主義に内外から批判が起こり、最終的に寛政五年（1793年）家斉が定信を解任することで、寛政の改革は強制的に終わっている。

それまでの反動もあり、家斉は豪奢しやせな暮らしを送るようになり、幕臣、多くの大名もそれにならった。庶民も同様である。

そのため、幕府財政はほぼ破産状態に追い込まれ、老中をはじめとする幕府官僚たちの間で賄賂や綱紀の乱れが横行するようになった。幕府の権威は失墜し、治世者としての徳川家の存在意義も失われつつあった。

腐敗する一方の幕府に対し批判が高まり、天保八年（一八七七）には大阪で大塩平八郎おおしおへいはちろうの乱が起き、同年六月には生田万いくたよろずの乱が起きている。また、各地で農民一揆も頻発するようになっていた。

この状況を憂うれいたのが、寺社奉行、京都所司代しよしだいを経て西丸老中を務めていた水野忠邦である。天保十二年（一八四一年）、大御所として幕政の実権を握っていた家齊の死去と同時に、水野は天保の改革実施に着手する。

まず人事の刷新を図り、気鋭の若手官僚団を組織した。主な者の名前を挙げると、遠山景元とこやまかげもと、矢部定謙やかもとまひなり、岡本正成、鳥居耀蔵しづがわひろなお、後藤三右衛門ごとうさんえもんその他である。

水野の構想は、享保、寛政の世に戻し、幕府の権威を復権することにあつた。そのために多くの法令を定めたが、最も重視したのは風紀ふうきしゆくせい正である。

徹底した幕府主義者の水野は、派手で華美になっていた町人の暮らしを許さず、あらゆる贅沢をすべて禁じた。奢侈禁止、風俗

肅正がその二本柱であった。

江戸町奉行の遠山景元、矢部定謙を通じ、江戸市中に華美な祭礼や贅沢をことごとく禁ずると布告したが、あまりにも厳しいその内容に、遠山と矢部は禁令の見直しを意見した。

だが、水野はこれを却下し、更に贅沢禁止令を強化した。異様な執拗さだが、水野にはすべての町人が悪に見えていたのであるう。

綱紀肅正のため、儉約令を發布し、同時に風俗取締を行なった。特に庶民の娯楽への迫害は激しかった。水野忠邦は優秀な官僚だったが人心を解することがなかったと後に評されたが、まさにその通りであった。武士以外の者が暮らしに<sup>よろこ</sup>歓びを見出すことを許せなかったのである。

水野が弾圧を加えたのは、歌舞伎、<sup>よせ</sup>寄席、<sup>よみほん</sup>読本など、当時の代表的な娯楽に対してであった。芝居小屋を浅草へ移転させ、三百以上あった寄席ほとんどを廃業させた。<sup>ためながしゆんすい</sup>為永春水、<sup>りゆうていたねひこ</sup>柳亭種彦など読本本の流行作家の本は発行を停止し、禁書処分にした。

歌舞伎役者に対しては最も厳しく、生活そのものまで規制した。町民との交際を禁じ、所在地も限定している。

水野は歌舞伎の廃絶まで考えていたと伝えられるが、北町奉行遠山景元の強い反対に、止む無く存続を許可した。ただし、その

代わりに遠山を北町奉行から大目付おおめつけに棚上げし、権限を奪っている。

天保の改革について、遠山より強硬な反対意見を持っていた南町奉行矢部定謙への処遇は、更に苛烈であった。矢部は天保四年（一八三三年）、大阪西町奉行を務めていたが、この時期部下の与力だった大塩平八郎と天保大飢饉への対策について、話し合いを持った。だが議論が合わず、大塩が与力を辞職することとなる。

四年後の天保八年（一八三七年）、大塩平八郎は自ら乱を起こし、幕政の非道を訴え、自決するが、矢部はその直前、勘定奉行に就任していたため、江戸に戻っていた。従って大塩平八郎の乱とは無関係だったが、天保の改革への批判を繰り返していたために水野の怒りを買ひ、天保十二年（一八四一年）十二月、大塩の乱に協力した罪により、南町奉行の座を追われたのである。

この時、定謙と大塩の結託を示す文書が証拠として採用されたが、すべて捏造ねつぞうされたものであった。偽の文書や証言を揃えたのは、水野の側近である鳥居耀蔵である。水野の指示ではなく、鳥居が自らの判断で矢部定謙を陥おとしれ、失脚させていた。

定謙は冤罪えんざいを訴えたがこれを裁いたのは後任の南町奉行、鳥居耀蔵であり、認められるはずもなかった。翌天保十三年（一八四二年）、定謙は伊勢桑名藩預かりとなり、罪人として幽閉された。こ

れを屈辱として、定謙は切腹して自害するに至る。

\* \* \*

「あんたの養父おやじさんが矢部定謙ってわけか」

ため息をついた團十郎に、そうですと落ち着いた声で鶴松が答えた。だったら俺の気持ちもわかるだろう、と團十郎は懐から取り出した煙管きせるに煙草たばこの葉を詰めて火をつけた。

「何が天保の改革だ。水野も鳥居も、ただ歌舞伎役者や咄家はなしか、読本作家が嫌いなだけなんだ。あいつらは町民が笑うことさえ、許すつもりがねえんだろう。人としての心を捨てろ、泣くことも笑うことも許さぬ、ただ幕府に仕える奴婢ぬひであればいいってことだ。浮草稼業の歌舞伎役者のことなんざ、虫けら以下だと思っていやがる。ふざけんじゃねえ、一分の虫にも五寸の魂と言うじゃねえか。踏み付けられて、黙ってるわけにはいかねえよ」

「だから鳥居を殺すと？」

当たり前だ、と團十郎は大きな鼻をこすった。決め台詞せりふを言う時の癖である。

「俺たちだけじゃねえぞ。役者や咄家の弾圧が済んだら、あいつらは人の心を潰しにかかる。侍以外は人であって人じゃねえと思っていやがるんだ。都合よく使われていりゃあそれでいい、つてなもん

だ。そんな連中を許しておけるか？」

威勢がいいね、とお葉が手を叩いた。黙ってる、と團十郎は鋭い目で睨みつけた。目が大きいだけに迫力がある。

「おめえに何がわかる。俺は七代目市川團十郎、てめえで言うのも面映おもはゆいが、江戸一の歌舞伎役者だったんだ。俺にとつて、舞台がすべてよ。そいつを奪われたんだぞ？ 殺されたも同然だ。鳥居を殺したつて、罰ばちは当たらねえだろうよ」

ですが、あなたは生きていますと鶴松が涼やかな声で言った。

「鳥居にも、あなたを殺すつもりはなかったはずです。それなのに、あなたがあの男の命を奪うというのは、不公平ではありませんか」  
俺だつて死ぬ覚悟はできてる、と團十郎は怒鳴った。

「鳥居を殺すのが難しいことぐらい、わかってるさ。だが、死ぬ気でやりやあ殺せねえはずがない。いいか、二度と邪魔立てするんじゃないぞ」

あなたは自分のことを何もわかっていない、と鶴松が肩をすくめた。

「七代目、あなたの命はそんなに軽くありませんよ。鳥居のような男と比べること自体間違っています。鳥居を殺せたとしても、あなたが死んでしまったのでは、差し引き勘定は大赤字ですよ」

あんたも侍だろう、と團十郎は吐き捨てた。



「商人みてえなことを言ってるが、錢儲けの話をしてるんじゃないやねえんだ。男には意地つてものがあつた。おめえにはねえのか？ 養父を殺されて、腹も立たねえか？ そんな腰抜け野郎に用はねえよ」

わたしの命も軽くありません、と鶴松が淡々とした様子で言った。

「鳥居のような腐つた魂を持つ者と一緒にされては迷惑というものは、鳥居を殺しても意味はありません。恨みを晴らしたいのであれば、力を貸してください」

何を言つてやがると怒鳴つた團十郎に、あなたを死なせたくありません、と鶴松が肩を掴んだ。痩せているが、見かけによらず力は強かつた。

「江戸中に七代目を待っている者が大勢います。もう一度あなたの舞台を見たいと願つている者たちです。天才は文字通り天から与えられた命で、あなたの都合で捨てることなど、許されるはずがありません」

何なんだおめえは、と團十郎は鶴松の腕を払つた。

「坊主みてえなことをぬかしやがつて……いったい何者なんだ？」  
何者でもありません、と鶴松が薄く笑つた。凄みのある笑顔である。

「矢部家は改易となりました。今のわたしは浪人の身。ただの町人です」

「そつちの女は何だ。てめえの女房か？」

止めてください、と慌てたように鶴松が腰を浮かせた。耳が真っ赤になっっている。狼狽ろうばいした様子に、團十郎は大声で笑った。

まだ三十にもなっていないくせに、妙に老成したところがあるが、お葉に惚れているのだろう。伶俐れいりに見えるが、どこか少年っぽさが抜けていない。

おめえの気持ちはわかる、と團十郎は鶴松の首根っこを掴んで引き寄せた。

「ちよつと柄は悪いが、あれだけの美人だ。惚れるのも無理はねえ。だが、おめえはどこから見ても不器用で、惚れたはれたの話にや、とんと弱いようだ。いいか、惚れた女をものにするには、とことん押しまくれ。女つてのは押しに弱いもんだ。口説き文句が知りたけりや、教えてやってもいいぜ」

結構です、と鶴松が團十郎の体を押しやった。

「そんなことより、あなたをここへ連れてきたわけをお話しします」  
これ以上からかうと本気で怒り出しそうだ、とつぶやいた團十郎に、わたしは養父を鳥居に殺されました、と鶴松が言った。

「あなたは歌舞伎役者としての命を奪われた。つまり、わたしたちは同じ立場にいます。するべきことはひとつ、仇討あだうちです」

「赤穂浪士あこうろうしか。いいじゃねえか。仮名手本忠臣蔵か な でほんちゆうしんぐらだな」

討ち入ろうぜ、と團十郎は短刀を前に出した。ゆっくりと鶴松が首を振った。

「巷間こうかん言われているように、鳥居という男は妖怪です。人としての心を失った化け物ですよ。命を奪ったところで、何とも思いません。なぜなら、命より大事なものがあからずす」

「命より大事なもの？」

金です、と懐の百文銭を鶴松が畳に放った。

「人の心を失い、妖怪になったのは金への妄執もうしゆうのためです。七代目、あの男の魂を奪いませんか」

「……魂？」

わたしはあの男のことをよく知っています、と鶴松がうなずいた。  
「養父が、と言うべきかもしれませんが。養父は鳥居の讒言によって奉行の職と誇りを奪われましたが、何かを企んでいると察し、それを調べていたのです。鳥居の悪知恵の方が数段上だったのは、認めざるを得ません。そのために養父は追い落とされましたが、ただで負けたわけではありません。あの男のことを克明に調べ、何のために養父に濡れ衣を着せ、罪人としたのか、わたし宛てに書状を遺していたのです」

鳥居は何をしようとしていたんだ、と團十郎は顔を上げた。

「どんな悪巧みをしていたのか知らねえが、証拠があるのか。その

書状つてのがあるなら、それを持って訴えたらどうなんだ」

あの男は頭がいいと言ったはずです、と鶴松が顔をしかめた。

「養父が捕縛されたその日、奉行所から大勢の者が矢部家の屋敷を壊しかねない勢いで家捜しして、すべてを奉行所に運び去っていきましました。鳥居は養父が自分のことを調べていたとわかっていたので、書状の類はとつくに処分したでしょう」

それじゃ意味がねえと言った團十郎に、ですがこの中に残っています、と鶴松が鬢の辺りを指でつついた。

「わたしは物覚えがいい方で、一度でも読めば、書いてあったことはすべて頭に入り、忘れることはありません」

「頭が悪いようにや見えねえが、何でもかんでもってことはねえだろう」

あなただつてそうでしょう、と鶴松が言った。

「芝居当日渡された台詞を、その日のうちに覚え、夜には舞台上で演じたと聞いたことがあります」

それが役者つてもんだと胸を張った團十郎に、似たようなものです、と鶴松が微笑んだ。

「じゃあ聞くが、鳥居は何をしてたんだ？ 何のためにあんたの養父さんを追っ払って、てめえが南町奉行になった？」

かげとみ  
陰富です、と鶴松が低い声で答えた。

「陰富？」

お葉さん、と鶴松が自分の湯呑みを掴んだ。

「すみません、わたしにも茶をいただけますか」

はいはい、と立ち上がったお葉が水を汲みに外へ出て行った。陰

富、と團十郎は腕を組んだ。

( つづく )